



第 128 号

発 行 者

東筑摩塩尻教育会

編 集 者

会誌会報委員会

支えられて今がある

東筑摩塩尻校長会長 赤羽 高志



教員生活も残りわずかになった今、たくさんの方に支えられ今の自分があることをひしひしと感じている今日この頃です。特に鮮明に思い出されるのは、初任校の頃のことです。

私の教師人生は、下伊那の学年五、六クラスの大規模校で小学校四年生の担任からスタートしました。全校児童一四〇

〇人位でした。K教頭先生は、「困ったことは忙しいこの私ではなく、学年主任の〇先生にまず相談しなさい。」が口癖でしたので私の事など眼中にないのだろうなと思っておりました。

ところが、五月放課後のこと、教室に入つて来られ「元気にやっついていて何よりだ。そうそう、この間の参観日のことだけど、赤羽さんは、指導書を片手に授業をしていたね。」ぼそつと言われ、すぐに教室から出ていかれました。特に小言を言われた感覚はなかつたので、その場は何のことだか分かりませんでした。しかし、その後になって、日々の授業に臨む教師の姿勢についての大事なご示唆であつたことに気がきました。「子どもを侮つてはいけません。子どもを軽く見ていたという自分自身でも気がつかないことを何気なく伝えていただいたような気がして

がして

います。二年目のこと、初の研究授業のお相伴が私にまわって来ました。張り切つてやったのはいいのですが、指導者の先生からは、「声の大きさはよかった。」と評価されただけでした。子どもたちの発言も少なく、しょんぼりと授業研究会を終え教室にもどると、二期目の先輩M先生が入ってきて、「赤羽先生、今日はお疲れ様。九人も発言したでしょ。いいと思わなきゃ。自分は前任校のとき発言は六人だったよ。」と励ましてくださいました。その時はじめて授業に挑戦したことに納得できました。後でお聞きすると、M先生の学級の子どもの人数は六人だったということでした。

また、初めて受け持った子どもたち四十三名の中に、社会科が誰よりも好きというS君がいました。社会科の授業は、視聴覚ライブラリーから十八ミリフィルム資料を借りてきて、問題提起や追究資料として活用していました。S君は、その映像をいつも食い入るように見つめ、自分の疑問や考えを素直に発言したり、記述したりする反応がとて面白い子でした。また、休み時間には、一緒に運動したり、休みの日には、友だちを引き連れ、私の教員住宅によく遊びに来たりしていました。そんなS君の生き生きしている姿を見て、担任の私は良き理解者だと過信していたのです。

六年生、卒業前のそわそわしている三学期の図工の時間のことでした。おしゃ

べりに夢中で、手が止まっていたS君を注意した直後、S君は逆に腹を立て、「何でもいつも先生は、俺ばかりを注意するんだ。もういやだ。二度と学校に来るもんか。」S君は卒業製作版画板に膝蹴りして、真つ二つにへし折り、ロッカー内の荷物を全部持って帰宅したのでした。私は放課後、家庭訪問へと向かいました。お家に入ると、リビングの炬燵に大きな背を丸め、しょんぼりと座っていたS君。私の指導力不足を詫びようとしたそのとき、S君の母親が先に「やつぱりあなたの先生 来てくれたね。」とS君に話しかけたのです。S君はおいおいと泣き出しました。私も自分の至らなさと悔しき、思いもよらない母親の「あなたの先生が」の言葉に涙が止まりませんでした。若く、未熟な教師にかけてくれた母親の温かな一言。人生の先輩として大きな心で接していただいたことに感謝です。

何かを成し遂げた時、その陰にはたくさんの方々の支えがあつたことを忘れずに、そしていつの日かお返しすることができれば幸いです。(塩尻西小学校)



特集

◆新学習指導要領を見据えた 英語教育・外国語活動の取り組み

「より相手に伝わるように話す手立てとは」

塩尻市立丘中学校

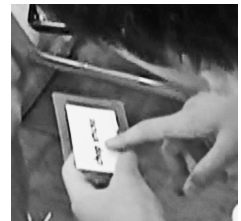
本校では、表現することを本年度の重点に置いて、各教科取り組んでいる。英語科では、自らの伝えたいことを相手に伝える手段としてのスピーチ活動を充実させてきた。他者を意識した実りのあるスピーチはどうあったらよいか、様々な実践を通して探っている。

これまでは、教科書のモデル文を参考にして自己表現文を作成し、発表するという活動を行っていた。その振り返りでは、「スラスラと読むことができた」という生徒もいれば、「棒読みになってしまった」などの反省を挙げる生徒もいた。いずれも、「発表する」よりも、間違いないように「読む」ことに意識が向きがちな振り返りであった。そこで、他者を意識して相手に「伝える」ということを重点に、より活き活きとした発表態度を養い、有意義なスピーチ活動を行いたいと考え、以下の活動を行った。

【即興的に話す活動】

カードに描かれた絵や写真について、即興的に一分間で話す活動を行った。話し手は、絵について知っていることなどを伝え、聞き手は、あいづち(Pardon?, I see, など)を用いながら、内容を理解できたか反応を示すようにした。話し手は聞き手の様子を見ながら、何と

かして伝わるように、単語をわかりやすく置き換えたり、絵を指さしたり、強調したりと言った姿が見られた。



【意味群(S)とセンテンスストレス(S)を意識した音読活動】

I cleaned my room / in the morning. After lunch, / I went to the library / and borrowed some books. In the evening, / I watched a soccer game / on TV. It was exciting.

〈New Horizon English Course2
「Daily Senel 日記」〉

意味群を意識したことで、音読するとき pause(とぎれ)が生まれ、一本調子だった音読にメリハリがつき、内容をつかみやすくなった。さらに、センテンストレスを指導したことで、強弱が生まれメリハリのある英語らしい音読ができるようになった。伝えたい表現に stress(強勢)を置くことで、さらにわかりやすい音読になることがわかってきた。

【ジェスチャーを意識した音読】

会話文では、実際に登場人物になりきって演技して音読するようにすると、内容を吟味し、よりよい演技になるように考え発表する姿があった。演技がうまくできない生徒には、小道具を使ったりジェスチャーや目線や表情を意識させたり

してから再チャレンジさせると、より臨場感のある発表に近づいた。

これらの実践を積み重ねるうちに、スピーチの発表が、単なる暗唱ではなく、相手に意識したものになってきた。普段はおとなしい生徒や消極的な生徒もジェスチャーを用いたり、相手に目をやったりと、「伝える」ことを意識して取り組んでいた。さらに、どのようにスピーチをするかわかりやすく伝わるかを話し合っ

て考え、実際にスピーチをしながらアードバイスしあって高め合う姿が見られた。今後の課題として、発表態度を養うことには成果がでている反面、内容に関する指導は不十分であると感じている。立ち振る舞いや話し方などを意識するあまり、不自然なジェスチャーをして必要以上に強弱をつけてしまい、「内容を伝える」という視点を十分に養えていないのが現状である。今後は、相手に伝えるために本当に効果的なことは何かを考えるといった活動を重視していきたい。そして、より意味のある「話す」活動につなげていきたいと考えている。(桑原 摩帆)

「外国語活動」から 教科化へ

広丘小学校

本校では、平成三十二年度の新学習指導要領の完全実施を前に、外国語教育英語の研究に取り組んでいる。今年度は、

【モジュール学習研究】

【担任主導授業研究】

【広丘モデル作成】

という三つの柱を立てて進めてきている。この柱を中心に、これまで得られた成果

と今後の課題について報告したい。

【モジュール学習研究】

本校では、左の表のように外国語活動の目標時間を設定し、モジュールという形を取り入れて指導を行っている。(モジュール日課は資料1参照)

現在、モジュール学習は定着してきているが、モジュール学習の良い面だけでなく、課題も見えてきた。良い面としては、毎日、英語に慣れ親しむことができ、短時間であれば担任単独でも指導しやすいということがあげられる。

課題としては、内容に合わせて計画を立てなければならず、十分な準備が必要なこと、確実に週五行うということが行事とのかね合いで困難であるということがあげられる。

①モジュールという形で時数を確保する。こういったことから、今後、

学年	本校目標時数 (塩尻市英語教育研究協議会指導時数)	内モジュール時数
3年	35 (25)	35 (国語)
4年	35 (25)	35 (国語)
5年	70 (55)	35 (外国語)
6年	70 (55)	35 (外国語)

※授業は基本的にTT。モジュールは学級担任単独
※5・6学年の目標時数70時間の指導を行うため、週一コマ年間35時間の授業の他に、1回10分週5回のモジュールの時間を設定した。
※3・4学年は、5・6学年の外国語活動の時間(モジュール)を国語の時間に充てている。
※1・2学年は帰りの会などに充てている。

資料1

4校時	11:45	45分
	12:30	
給食	12:30	15分
	13:30	45分
清掃	13:30	15分
	13:45	
移動		5分
(モジュール)	13:50	10分
	14:00	
移動		5分
5校時	14:05	45分
	14:50	

②外国語活動を週二コマにする。という視点で研究検証し、進めていく予定である。

【担任主導授業研究】

今年度より、学年会にJTEが参加している。担任主導で授業を展開するために、学年の外国語活動担当だけでなく、担任全員とJTEとの話し合い、連携を取っている。

二学期に入り、五・六年年ではJTEと連携を取りながら、HRTが指導案を作った。そのため、より他教科との横断的なつながりを意識した授業作りができたようになった。また、子どもの実態に合わせたToday's Pointを据え、振り返りまでのつながりを意識した指導ももっている。

一方、担任主導の授業を行うとすることで、担任の英語力が不十分であることや、授業でJTEやALTとの役割分担がうまくいかないこと等が課題としてあがってきた。職員研修やJTEとの連携を深める中で研究を進めていきたい。

【広丘モデル作成】

広丘モデルの作成は、次の三つのことである。

- (1) 年間指導計画の作成
 - (2) 単元計画の作成
 - (3) 授業案の作成
- (1)各学年の他教科との横断的な内容を取り入れること、その学年の特色を生かすこと、三・六学年での縦のつながりを考えることを意識して作成する。
- (2)終末の「ねがう子どもの姿」を明確にし、その実現のために子どもの実態に合わせたToday's Goalや活動を設定する。
- (3)担任主導で授業展開を考える。毎時の

Today's Goalを意識した展開にすると、授業の流れを毎回同じにし、そこにHRT、JTE、ALTの分担を明記して作成することで分かりやすい授業案になる。今後、これを積み重ね、来年度につなげていく。

(外国語活動研究部会研究主任 横山 真司)

「新学習指導要領を見据えた英語教育・外国語活動の取り組み」について

塩尻西部中学校

現行版学習指導要領の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」が、新学習指導要領では、この資質・能力を「教育の三本の柱」とし、全ての教科でこれらの柱に沿った「目標」や「内容」を詳細に記述している。「外国語」の「目標」を見ると、全体的には新・旧ともに、同一の方向を旨ざしていると考えられるが、新学習指導要領では説明がとてども丁寧になっている。また、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」という、新しい文言の「見方・考え方を働かせ」は、全教科の「目標」の記述に用いられている。中教審答申では「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」とは「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」と整理している。すると、外国語でのコミュニケーションとは、

- (i) 相手のあることばのやり取りである。
- (ii) やり取りの背景にはそれぞれの人やそれぞれの文化がある。
- (iii) だから、場面や状況に応じて、考え工夫して表現することに意味がある。と考えられる。

My father was a baseball player. というドリル練習では、自分の父親が野球選手の経歴をもっていないくても、皆、声をそろえて言うが、自分の父親のこともイメージしていないし、周囲の反応も期待していない。よって、Myが自分のことを指す語だということを子どもが考えることはできないだろう。指導する側が「英語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」て、実際の場面を想起できる言語活動を豊富に取り入れることで、生徒自らが「見方・考え方を働かせ、言葉や表現を自分のものとして習得できるように」と考えられる。以下は、[New Horizons Daily Scenes よろこび]の実践例である。

【授業記録】

○スキットの登場人物の関係性を決め

出し、人物の気持ちが表示されるように読みたいという思いをもてた生徒。相手のことばのやり取りが考えられている。



Today's Goal	さし、人物の気持ちが表示されるように読みたいという思いをもてた生徒。相手のことばのやり取りが考えられている。
Today's Point	エリカは恥ずかしがり屋。エリカは肉食系。

T: 設定「2人は友だちだけど、実は両想い」In this situation, "Would you like to come with me?" ... How do you feel?

S1: (ニヤニヤし、ためらったあと...) トキドキズッキューン!

T: "I'd love to." をどう読んだらその気持ちが伝わるかな?

Ss: (登場人物の気持ちをどのよう表現しようかと考え始める。)

○登場人物の性格も、表現をする上で重要なポイントとらえた生徒。

S1: 好きな人に誘われたら、嬉しいよ。すごく大きい声で返事をするだろう。

S2: 嬉しいけど、少し恥ずかしい。小さな声で返事するかな。

S1: 嬉しい気持ちの表現は人によって変わるから、エリカやエリカの性格を決めないと!

登場人物の関係とそれぞれの性格を決め出し、場面に合う声の大きさ・強弱・速さについて、活発な意見交換が生まれた。

(エリカは恥ずかしがり屋。エリカは肉食系。)

S1: この設定なら、誘う時はかなり緊張しているはずだよ。

S2: 相手のことが好きだし、断られたらどうしようと考えながら、小声で聞いたんじゃないかな。

S1: あー、相手の出方を伺う感じが。

S3: エリカはきつと、大きな声で返

事をしたんだろうね。

練習では、登場人物になりきって表現したり、友の姿に触れて喜びを感じたりしながら、ペア練習や、友の発表の評価に積極的に関わる姿がみられた。

生徒の振り返り
「いつも読んでいる教科書がいきいきと感じられた。登場人物にも自分たちと同じように色んな気持ちがあるとあった。」

以上の実践のように、

○登場人物の心情を考え気持ちを込める。その読み方を具体的にする。Today's Pointを設定する。

○友の良さを共有しながら、気持ちを込めた音読を促すことで、音読でも、機械的に発音するだけでなく、生徒も外国語でのコミュニケーションとは、前記の(i)・(ii)・(iii)であるということを理解して、教科書本文の英語と向き合うことができた。

主体的・対話的で深い学びは生徒だけの話ではない。英語教育に対する意識を見直し、判断し、自らが主体的に授業改革に取り組んでいきたい。(笠井 勇也)

小学校英語の教科化・必修化に向けて

吉田小学校

一 はじめに

本校では、国際理解の学習を一〜四年は学校裁量の時間として、五・六年は外

外国語・外国語活動年間指導時数計画

	H28	H29	H30	H31	H32
1年	17	17	17	17	17
2年	17	17	17	17	17
3年	20	25	30	35	35
4年	20	25	30	35	35
5年	35	45	60	70	70
6年	35	45	60	70	70

国語活動の時間として、担任とJTE、ALTと共に積極的に進めてきた。しかし、新学習指導要領では、五年の英語の教科化で七十時間、三・四年の外国語活動必修化

で三十五時間と授業時数が大幅に増える。現在の週時数では授業時数が確保できないことや、JTE中心に授業案を作成し進めてきたが、担任が中心に授業を進めていく必要があるなど、大きな課題が見えてきた。そこで、本校では、今年度から三年かけて完全移行できるように、できることから取り組むことにした。

二 モジュール学習

今年度増加分の時間は、清掃後の十分間読書の時間を充てることにした。十分×五回で一時間分とし、九月末から取り組んだ。また、このモジュール学習は、担任が進めることにした。年度当初にJTEと打ち合わせをして、どのクラスでも同時に担任が授業を行えるように、英語の歌のCDを各クラスに配布し、チャイツなどで使う絵カードもクラス分準備してもらった。デジタル教科書にあるHi, Friends! Plusのプリントアウト用資料もいつでも使えるよう整理し保存してもらった。さらに、モジュール学習を始めるために、夏休み中に、学年ごとに内容の打ち合わせをし、教材準備の時間を取った。

① 実際にモジュール学習で行ったこと
・三年 授業で習った言葉の復習。(歌

や絵カードでチャイツ、色ぬり) NHK英語番組視聴。

- ・四年 大文字と小文字を書く。チャイツ。デジタル教科書
- ・五年 ワークシートで授業の復習、チャイツ、デジタル教科書
- ・六年 天気、曜日、日にちなどの会話。身近な生活の単語。ジェスチャーの練習

② 子どもたちの様子

- ・楽しそうにやっている。
- ・できる子とできない子の差が大きい。
- ・することがわかっているので安心して取り組んでいる。
- ・苦手な子は固まっている。

③ 成果

- ・言語活動は、短時間でも続けることで効果がある。
- ・時間が短いので集中してできる。
- ・飽きないで楽しんでいる。

④ 課題

- ・年間計画を立てて、準備しておかないと内容や時数が確保できない。
- ・取り組ませることで精一杯で、個別支援ができない。
- ・午後の活動の時間が確保できないことも多く、モジュール時間だけでは増える三十五時間を確保することは難しい。

三 担任主体の四十五分授業の確保

モジュール学習だけでは、増える分の授業を補うには内容的にも時数的にも厳しいので、四十五分の授業を増やしていく必要がある。現在三人で授業をしているが、担任とJTE、担任とALTで授業を行うと、同時に二クラス授業ができる。また、児童会・クラブが無い時に、そこで外国語活動の授業を入れていくこともできる。それらとモジュール学習を

組み合わせることで、五・六年の七十時間、三・四年の三十五時間の授業時間は確保できると考える。

四 終わりに

最初は、授業時間確保のために始めたモジュール学習だったが、プラスの効果も見てきた。十分という短い時間であり、主の四十五分授業で行ったことを復習するという学習のめあてがはっきりしていることもあり、子どもたちが理解を深めている。それとともに先生たち自身が英語の授業をすることに慣れ、一人で授業を行うことに自信がもてるようになってきている。担任から英語でどう説明すればいいのか、こんな教具やワークシートが欲しいとJTEと積極的に打ち合わせを行うようにもなってきた。今後、小学校英語中核教員を中心に、目標や内容についての研修を深め、来年度の年間指導計画を立てて行く予定である。

モジュール学習でも、「聞くこと、読むこと、話すこと(やりとり)、話すこと(発表)」、書くこと」の五領域をバランスよく取り組めるよう検討していきたい。子どもたちにとっても先生たちにとっても、苦しい外国語学習でなく、言葉の壁を越えて人と人がつながり仲良くなれる楽しい外国語学習になるようにしていきたい。(山崎 公子)

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

本号では、四校の取り組みを寄稿していただきました。ご協力ありがとうございました。

